# ペンは剣よりも強し！

トーマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ペンは剣よりも強し！

【Ｎコード】
Ｎ９６９６Ｘ

【作者名】
トーマ

【あらすじ】
魔王を倒す術を探すべく、青年は異世界へと渡る。@過去にエブリスタ様にて投稿したものです。ぶっちゃけ黒歴史。コメントあれば欲しいっす@

## （前書き）

世界設定とか色々省いています。察してください・・・

ひたすらペンを走らせる。紡がれていく理論式。手は酷使しすぎて痛みを訴える。昨日までなら一旦休憩、となったのだが、今は違う。

ペンは止まらない。頭で考えるよりも先にペンが走る。のた打ちまわる黒いミミズの群。終わりが見えてきた。手が動きを速める。ここまでくれば、もう書かなくても分かる。興奮でペン先が潰れそうだ。ミミズの群がようやく通り過ぎ……

「できた……」

計１００枚からなるだろう、理論式の紙束を広げ、見渡す。皆からすればただの文字の羅列にしか見えないだろうが、それは後に書かれたものほど収束、単純化していき、驚くほど綺麗にまとまった。

「できた……！」

ついに、できた。この国、いや、この世界の希望となるだろう魔

法の理論式。まずは手直しといきたいのだが、皆待っていてくれたのだ、いますぐ伝えたい。速く速くと急く体を抑えきれず、部屋の外へ走り出す。しかし、脚がもつれて転んでしまった。体が動かない。流石に根を詰めすぎたようだ。誰か……

※　※　※

この世界に魔王なる者、いや、物が確認されたのは、つい三月前のことだった。海を越えた隣の大陸に突如として現れたソレは強靭な肉体に膨大な魔力をもち、魔物を率いて国を人を、自然を蹂躙し、僅か一月で大陸全土を死の焦土に変えた。

ここでようやく我が国、デルト王国が動きをみせる。いや、ようやくとは言えないかもしれない。これでも早いほうだ。なにしろ一月である。隣の大陸とは十年も前から相手を侵略しようと互いに攻めあってきたが、決着がつかず４年前に和平条約が結ばれたばかりだ。つまり、６年かかっても国は、大陸は落ちなかったのだ。それをわずか一月。隣の大陸には英雄と称される強者も数多くいたのだが、歯が立たなかったようだ。正直未だに信じられないくらいだ。

国王は調査の結果、このままではこのアリステア大陸も滅ぶと見て、この僕にある命令を下した。それは『異界の神、またはそれに準ずるものの召還』、である。要するに戦力を連れてこいとのことだ。僕以上の魔法使いはもはや存在しない。よって僕がその役目を負うことは当然と言えば当然だった。

結果から言えば、この計画は早々に破棄された。

神といえば数々の伝承、遺産の研究から『高密度なマナからなる上位生命体』であると考えられている。城であてがわれた部屋に籠もり、異界から神に来てもらうイメージを頭に描き、文字に起こして理論式を書く。意外や意外、3日も経たずできてしまったのだが、欠陥、それも重大な欠陥が見つかった。

使用マナ量が多すぎる。

召還には対象と同じマナ、または魔力量が必要だ。この世界にいるマナ生命体、例えば妖精などのマナの量を参考に、魔王に打ち勝てるだろう強さをもつに必要であろうマナの量を計算すると、全世界が死の荒野になるほどマナが必要ということが分かった。

これでは本末転倒ということで、再度検討し直すことに。着々と過ぎる時。魔王の行動がつぶさに報告される。期限は迫っていた。そうしてああだこうだと悩むこと半月、理論式を眺めているうちに

あることを思いついた。

自分が行くのはどうだろうか……？

別に異界でなくてもいい。異なる世界の技術、つまり、異世界には、この世界にはない新しい技術や魔法があるかもしれない。その中に魔王を倒せるものがあれば、それを学び、持ち帰ればよいのだ。

『神隠し』という現象がある。ある日突然ふらっと、人が消えてしまうのだ。さながら神によって異界へ連れて行かれたがごとく。もちろん、真相は人攫いによる犯罪がほとんどなのだが、稀に本物の『神隠し』も確認されている。そして、それは例外なくマナ濃度が高い場所で起きている。推測するに、高濃度のマナは空間を歪め、『傷』をつけるのではないかと思う。実際隣国の英雄が何年も貯めた魔力を使い大規模魔法を使った際に、彼の周りの空間は捻れていた。あの場にいて生き残ったのは僕だけなので誰も知らないだろうが……

つまり、たまたまできた『傷』に人が落ちることが『神隠し』の原因、ということだ。『傷』の先に何があるか。ここで僕の目的である異世界がでてくる。

『傷』の先に異世界があるのではないだろうか？

随分安直だと思うだろうが、僕がこの考えに至ったのには理由がある。神の伝承にこんな文章がある。

『我々は皆膝をつき、頭を垂れて神に乞うた。“これからも我らをお見守りくだされ”、と。すると神は“私は他の世界を護らねばなりません。なので代わりを呼びます。それでは、バイビー”、と仰った。神が光る御手を翳すと何やら筋のようなものが現れ、そこから神はお帰りになられた』

この文から異世界の存在。そして、神が異世界へ『空間にできた筋』から行ったことが分かる。ここで、先の研究が思い出される。『神とは高密度なマナでからなる上位生命体』、だ。高密度とは高濃度、つまり、この『筋』というものは『傷』である可能性が高い。そう考えたのだ。

早速実験を開始する。空気中のマナ濃度が高い場所を選び、マナを限界まで練り込んでいく。徐々に空間が歪んでいき、そして『傷』が開いた。ここからである。

「“復讐（リベンジ）者：腕（アーム）”」

右手から不可視の腕が伸びる。“復讐者”は大気中のマナや魔力が多いほど、つまり、相手の魔法を喰らえば喰らうほど大きくなる、伸縮自在で透明な魔力体だ。当然、対魔法使い戦には重宝していて、特に“腕”は使い勝手がいい。今回はこれを使って『傷』の向こうを探ることにする。生命あるところにマナあり。逆にマナあるところに生命あり、ということだ。『傷』に入る際少し抵抗を受けたが、そこからはすんなりといけた。今のところマナの反応はない。少し広域に広げてみる。

「“百手（ブレイク アップ）”」

“腕”の先が分裂していく。もし見えるのなら、さながら魔物の触手に見えただろう。どんどん伸ばしていくと……見つけた。どうやら真っ直ぐで良かったらしい。さらに伸ばしていく。と、何かに当たった。これが異世界空間の壁だろうか？広げた“手”を元に戻す。こちらからマナを集め、“腕”を通して送り込んだ。『傷』が開く。今回は調査なので少しでいい。

“腕”が……入った！　おそらくこれが異世界だろう。伝わる情報から、大気中のマナは極々微量のようだ。しかし、生体マナの数が圧倒的だ。どうやらこちらの世界より生物が多いらしい。周りは小さい反応しかないので草木、つまり森の中だろうか？　知的生命体ではなさそうなので、安心して入れる。

今すぐに行きたいところだが、グッと堪える。まだ実験の途中だ。失敗は許されない。

調べていくうちに分かったことは、
?生物は『傷』に入ると死ぬ。
?しかし、周りをマナや魔力で覆えば問題ない。
?『傷』はマナの供給がなくなると、5分程度で消える。
?『傷』の中のマナや魔力は残る。
ということだ。ただし、?については暫定的だ。

以上のことから、僕はこちらとあちらとを繋ぐ道を“復讐者”で作ることにした。直方体の真ん中をくり抜いた形だ。

方針が決まったので、後は理論式を固めるだけだ。どんどんがりがり書いていく。前回同様すんなり終わると思っていた。が、しかし。色々補正、軌道修正していくうちに、一月がたった。この頃の僕は血走った目に痩けた頬、骨ばった身体で今にも死にそうだったらしい。次々浮かぶ考えに興奮し、迫る脅威に怯えていたので、体調を気にする余裕などなかった。

※　※　※

眩しさに目が覚める。日の光を見たのは何日ぶりか。どうやら食事を運んできたメイドが倒れている僕に気づいたようだ。助かった……

まず食事をとる。喉を通りにくい。伸びた髪と髭を整え、正装し、国王の元へ。もちろん、理論式も忘れずに。歩いていると皆が挨拶をしてくれたので返す。顔が忘れられていないか不安だったのだが、杞憂だったようだ。正直不審者と思われたらどうしようかとびくびくものだった。どうやら国王は総務室におられるらしい。扉の前にいる近衛兵に名を告げて、通してもらう。

「失礼致します」

この国の主が手元の資料からこちらに顔を向ける。年齢に似合わず締まった体躯、彫りの深い顔立ちは変わらない。しかし、後ろに縛った黒髪に見える幾本かの白い筋が彼の心労を表している。

「おお、そなたか。待っていたぞ。倒れていたと聞いたが、身体の

方はもうよいのか？」

「お気遣い、感謝致します。して、陛下。早速本題に入ってもよろしいでしょうか？」

「うむ、申せ」

「はい。先日……」

国王に完成した魔法について報告する。魔王のことも聞いた。どうやら遂にこの大陸に到着したらしい。幸い、デルト王国は内陸部にあるのでまだ被害はないが、隣国では甚大な被害を受けている。

「時間が無いですね……」

「この国には半月かからぬうちにくるだろう。アデル、できる限り早く頼む」

「ええ、早速明日出発しようと考えています」

雑談もそこそこに部屋を出る。思っていたより時間がないようだ。行く準備をしなくては。僕が見つけた異世界は大気中のマナ濃度から魔法が未発達であることが予想される。文化レベルも全くの未知数。何を持っていくべきか……

持ち物は
・ナイフ×２
・魔道具×５
・携帯食料３０食分
・紙×１０
・ペン×２
・布（１×２）×５
に決めた。できるだけ身軽さを重視する。

次に身体の調子を確かめる。……かなり鈍っているようだ。食堂で飯を詰め込み、訓練所を覗く。どうやら、探し人はいるようだ。相変わらず目立っている。彼女は地に臥す人の海の中心で一人、素振りをしている。白に金の装飾が施された輝く鎧に、かすかに靡く金の髪の戦乙女が戦死者のもとに舞い降りたかのようだ。屈強な男たちの波を単身ねじ伏せる彼女は、この国の騎士の長だ。そして、

「やあ、リリア」

「アデルじゃない、久しぶりね。戦る？」

僕の幼なじみだ。昔から腕っ節に定評があった彼女だが、まさかここまでなるとは誰が予想しただろうか。

「いや、最近身体を動かしてなくてね。調整を手伝ってほしいんだ」

「分かったわ」

「調整だからね、調整」

「分かってるわよ」

彼女とはたまに魔法無しの組み手をするのだが、なにしろ彼女は強すぎる。調整でも本気で挑む必要があるかもしれない。

「それじゃ、始めるよ。“空の踊場（マチュピチュ）：無（プレーン）”」

僕の頭上に広い足場ができる。この魔法は彼女が以前模擬試合を始める際に、場所がないからと言って倒れた人を蹴り飛ばそうとしたので作った。理由はアレだが、使用頻度は高い。上に上がる。今回は調整が目的なので場所を“無”にした。もう少し時間があれば“街（シティ）”で市街戦の予行演習もしたかったのだが。

リリアは既に、僕の背丈程の長剣を構えている。ナイフを取り出す。あまり使い慣れていないが、実際に使う武器で調整したほうがいいだろう。

「あら、装備変えたの？」

「目立つ恐れがあるからね」

「何？　潜入任務受けたの？　どこ？」

「い、いや、違う。この前手ぶらで街歩いてたら襲われてさ。ナイフくらい持とうかなと」

「ふーん、殊勝なことね」

危ないところだった。彼女には今回の任務を伝えていない、伝えてはならない。国王に頼んで箝口令も出してある。というのも彼女、なにかと僕についてきたがる。いつもなら助かるのだが、今回は違う。行き先は全く未知の世界で危険だし、そもそも魔法の性質上僕しか行けない。

「それにしても街中で襲われるなんて、鈍ったもんね」

「うん、だからこその調整だよ」

「……もう、いいわ。始めましょう」

「あ、あれ？　リリアさん、怒ってない？」

「気のせいよ。ホラ、行くわ、よっ」

「え、嘘っ、ちょ、リリアさん？　調整って……」

初動で一気に距離を詰められる。速すぎて身体が追いつかない！

「うるさい、くたばれ」

放たれるは神速の一閃。

あ、……こりゃ僕死んだわ。

※　※　※

予定から一日遅れたが、異世界に行くことにする。早速始めようかと思ったが、術式は秘匿にしなければならない。マナ濃度の高いこの場所は森の中なので見られることはないと思うが、念には念を入れて。

「“不可知（インビジブル）：視”」

僕を中心に半径１０ｍほどの結界が展開される。結界の中は、例え“千里眼（リモートアイ）”を使っても覗くことはできない。それでは、始めるとする。まずマナ圧縮し『傷』を作る。そして、先日完成した魔法を発動。

「“異世界（バイビー）巡り”」

『傷』が形を変え『扉』となる。『扉』にしたことには２つ理由がある。まず僕が通るには『傷』は小さすぎる。そして次に僕以外の人間が異世界を行き来できないようにするためだ。具体的には僕の魔力でしか『扉』は触れないようにしている。この魔法を作る際に一番苦労したのがここだ。僕しか触れないという理論式の形が思いつかなかったのだ。四半月ほど悩んだ末に、以前知り合いが『共振』なる現象について話していたのを思い出し、それを魔力で転用してようやく導くことができた。

しかし、苦労しただけの価値はある。なにしろ僕以外が通れるとなると、『神隠し』が起こったり、異世界の技術を悪用されかねない。そして何より、向こうからの侵攻の可能性がある。こっちは既に魔王で手一杯なのだ。これ以上の厄は勘弁したい。

『扉』を開けて一歩踏み出す。硬い感触、『通路』はできているようだ。『扉』を閉めて、進み出す。初めて見る『傷』の向こう。

暗い、というよりは、黒い。何も見えない。『通路』に色彩加工しておくべきだったか？　だが、感じる。異世界に付けた魔力の『印』。異世界側の『扉』に触れる。手が、いや、身体が震えているのに気づく。開けば異世界。これは、興奮？　歓喜？　それとも恐怖？　関係ない。選択は進むの一択のみ。

そして、『扉』は開かれる――――――

※　※　※

初めに感じたのは暑さだった。纏わりつくような、粘つく暑さ。目の前は木、木、木。ここは森の中のようだ。もしかして、失敗したか？　しかし、マナ濃度を見るに成功したようだ。それにしても、匂いが薄い。土が痩せているのか？つらつらと考えていたが、徐々に動悸が増してくる。ようやく実感してきたようだ。

……僕は異世界に来たんだ！

小躍りしたくなる、いや、実際したのだが、なんとか衝動を抑え

こむ。今は潜入中。もし喜声もとい奇声をあげでもすれば、すぐさま包囲、捕縛、さようなら、となりかねない。ここは、敵地なのだ。ひとまず木に登り、人がいそうな場所を探す。魔王を倒す情報を集めるには、まずこちら側の人、いや、人でない可能性も……？　ともかく、知的生命体に接触しなければ始まらない。すぐに町らしきものが見つかった。逆方向に2つある。見たところ、片方は大都市のようだ。巨大な塔が並んでいる。観るならこっちか。

「“千里眼（リモートアイ）”」

マナ濃度が低いので魔具に込めた魔力を使い、魔法を発動。町の様子を観察する。行き来する生物はどうやら人。服装、挙動、歩く速さ、警戒度、男女比を調べる。服装は上下が分かれた、狩人の服のようで、全体的に清潔感がある。歩く速さは速いが、警戒心がまるでない。みな、戦士ではないようだ。門番どころか門すらないところを見ると、おそろしく平和か、危機管理能力に欠けているらしい。男女比はほぼ同じなので、僕が行っても目立たないだろう。

次に、建物とその内部を観る。服屋、食堂、飾り屋、事務、住宅。各店で何をしているか、貨幣はどうか、人の多さ、挙動を確認していく。特に、貨幣は大事だ。情報に先立つものはつきものである。どうやら、紙に硬貨、それにギルドカードのようなものもある。なんとなく大小関係は分かってきた。

ざっと見たが、武器屋はないらしい。どうやら民に戦闘能力はないようだ。巡回中の兵もいないようなので、潜入は容易いだろう。それにしても、人が多さにも驚いたが、事務の多さにも驚いた。識字率が高すぎる。それに、もしかしたら貴族なのかもしれないが、住宅の質が全体的に高い。よく分からないものが多いが、部屋と調度品の数がそれを物語っている。しかし、家庭の繋がりはあるのだろうか？　一家で食事をする場所が見当たらない。いや、もしやこれは寮のよう、なぁああ！？　な、なんでこんな日も明るいうちから湯浴みをしてるんだ！

日も落ちてきたので観察を打ち切る。だいたい把握できたが、念には念を入れてより広い範囲でも調べておこう。侵入先に溶け込むには、情報がいる。溢れるばかりの情報を観て、取り込み、潜入する。今日の分の食事をとり、“障壁（バリア）・箱（ボックス）”を張って早々に寝ることにした。

日の出と共に目を覚ます。簡単に食事をとり、昨日の続きを始める。今日はより広範囲で調べ、この世界の戦力を知りたい。手っ取り早いのは、実際に戦闘を見ればいいだろう。できれば戦争くらいの勢いでしていてくれるとありがたい。というわけで、布をこうしてこうして、と。

「“探索（サーチ）・戦闘（ワー）地域・大規模（エリア）”と“投影（シアター）”」

木にくくりつけて張った布に戦闘風景が映し出される。あれ、暗い？　夜みたいだ。おかしい、この世界は地域によって明暗でもあるのだろうか。今現在の映像の場所は……下、地下！？　なんと、地底文明まであるのか。いや、しかしあれは空ではなかろうか？
ふむ……

「“俯瞰（イーグルアイ）”」

視点が目の位置から僕を遥か上空から見下ろす形に切り替わる。
んー、どこも明るいな。もっと上げてみるか。まだ、まだ、まだ、お？　端の方が暗く、歪んできた。さらに上に、上に、上に……こ、これは……

丸い！？

なんと大地が球体だ！　映像の場所は地下ではなく裏側だったのか。なんとも奇妙である。裏側の人はどう立っているのだろうか？
むむむ……おっと、危ない危ない。目的を忘れるところだった。今は戦力の確認である。……何やら一方的である。歩兵の姿が見あたらない、乗り物ばかりだ。いや、しかしこれは、ふむ。……やはり魔法で代替できるものばかりか。これは『力』、魔王を倒す力にはなり得ないようだ。しかし、これは予想済みである。僕がこの世界に求めるのは発想、知識である。次はそのあたりを探していこう。

※　※　※

目がショボショボする。どうやら映像の見過ぎらしい。丸４日は寝ていない。まあ、すぐ治るのだが。

「“回復（キュア）”」

ふぅ。発想を探し求めて、まずは研究が行われている場所を覗いたのだが、さっぱり理解できなかった。当然である。一般人に僕の理論式が理解できないように、この世界の魔法のようなものを予備知識もない僕には理解不可能だ。勉強しようにも時間がない。仕方なくこの世界の大画面情報端末を見ていると、面白い『技』が映されていた。『ラ・センガン』というらしい。風を掌に高速回転、圧縮させて、相手にぶつける技らしいが、これは目新しいし、使えそうだ。そして何より、使われている技術が魔法のようなのだ。どうやらこの世界に魔法は存在しないが、魔法という概念はあるらしい。そして、空想の物語を映像化したものがたくさんあるようだ。

これは使える……！

幾つもの布を眼前に張り巡らし、同時に多数の物語を投影する。時間がないので“並列演算（パラレルタスク）”を使って一気に情報を処理していく。

そして気づけば４日経っていた、と。いかん、あれは中毒性があるな。また今度見よう。４日使ったわりに成果はあまりあがらなかった。やはり物語というだけあって、超展開でどこからともなく力が溢れ、相手を倒すものが多い。悪役の技には目を見張るものもあったが、魔王に通用するかは疑問だ。やはり、実際に現地で情報を集めるほうがいいのだろうか？　明日、町に繰り出してみよう。

※　※　※

潜入を開始する。布を材料に、“作製（オーダーメイド）”で服を作る。着てみると少し動きにくい。戦闘には向いてなさそうだ。手始めに町を歩き回る。魔法では得ることができない情報を取り込み、下調べに上書き、修正をしていく。臭いがキツい。貧民街のような排泄物の臭いでは

ないが、なんともいえない臭いだ。大気中の成分は分析済みなので毒の心配はないが……。肉眼見ると風景が少しぼやけている。あと、乗り物からの音と風が強い。魔法なしにしては速いと思っていたが、防音、防風魔法が施されていないので少し煩わしい。知覚できた情報にあまり有益なものがない。時間と情報量が比例しないのは、なんとも苦しいものである。異世界に来て早くも6日目。隣国の防衛線が突破されたあたりだろうか。隣国などはどうでもいいが、僕の周りの人が死ぬのはいただけない。早く『力』を得て帰らなければ。

もういっそのこと、皆異世界に避難するのはどうだろうか？　などと切羽詰まってきた頃、ふと、一つの看板が目に入った。『タナカ歯科』と書いてある。ここは確か歯になにかする場所だったはずだ。何故か処置を受けた者が皆、酷く痛がっていたのが印象的であった。このまま歩き回っていても仕方がないので入ってみる。

「こんにちは、初診の方ですね。保険証はお持ちでしょうか？」

建物に入ると、中は壁が白で統一され、明るい。受付もよく教育されているようで、言葉遣いが丁寧だ。貴族御用達だろうか？　客層を見る限り、そこまで裕福だとは思えなかったが。まさか、貴賤に服は関係ないのだろうか？　調べ直す必要がありそうだ。それと、『ホケンショ』とは一体……？

「すまないが持ち合わしていない」

「では次回お持ちください。診察カードを作りますので、この用紙に必要事項をお書きください」

どうやら無くても大丈夫らしい。空白を埋める。あらかじめ考えておいた、この町、世界に適した人物設定に沿って書く。読み書きも魔法で補助されている。不自然ではないはずだ。

「木村さんですね、それでは中へどうぞ。一番手前の席です」

受付の横にあるドアを開けて入ると、奇妙な形、材質の椅子が並んでいた。ゴチャゴチャしてよく分からないが、かなり機能的である。指定された席に座る。……おお……！　なんて快適なんだ！　フカフカだ！　座り心地を堪能していると、白いローブのようなものを纏った男がきた。毎回この男が歯をいじっていたので、今から始まるのだろう。

「ハイ、じゃあ倒しますねー」

「うお！」

男が言うや否や、背もたれが動きだした。観てたので知っていたが、実際に魔法なしに椅子が動く、否、変形するとは驚きである。

「どうしましたー？」

「い、いや、なにぶん初めてなものでな」

「へー、その年で。それじゃあ虫歯だらけかもねー」

「ムシバ？」

「ん、まあ心配しなくていいよ、俺上手だし。ハイ、お口開けてー、わ、君意外と歯、綺麗だねー。けど奥の方に一つ、キツい虫歯があるねー、あ、これ神経いってるっぽいねー、ご愁傷様」

何やら色々言われたが、ここはどうやら歯を診る医院で、この男は医者らしい。そして診察結果は、『ご愁傷様』とは、つまり……

「や、病なのか？」

「んー、まあ歯の病気だよねー」

「治るのか！？」

ここで死んでは魔王を……リリア……！

「うん、治るよー」

「ほ、本当か！？」

「ホントホント。もー、大袈裟だなあ、君。それじゃあ詳しく見るし、もう一回倒すねー、ハイ、お口開けてー」

良かった……そういえば、さっきはなぜリリアの顔が浮かんだのだろうか？　まさか……いや、でもあいつはただの幼なじみで……と、悶々と実のない思考を続けているうちに、調べ終わったらしい。

「んー、やっぱり神経達してるみたいだねー。どうする？　今からパパっと治療しちゃう？」

「む……それでは頼む」

「んじゃ今から始めるけどさあ、麻酔する？　するよねー」

「麻酔とは？」

「ホラ、ドラマとかでよく見ない？　感覚マヒさせて痛み感じないようにするさー」

「痛みを感じなくする……か。いや、必要ない」

僕は魔術師として身体は鍛えているし、痛みにもなれている。それに、痛みよりも免疫のない物質を使われるほうが怖い。

「ふーん、チャレンジャーだねー。まあ、いいや。ハイ、お口開け

てー」

口を開けると男は何やら道具を取り出した。ペンの尻に太い紐が付いているようだ。チュイィィンと、突然ペンの先端が回転し始めた。魔法も使わずこの小ささに回転の速さ、感動ものである。そして男が先端を歯に押し当て……

ヴィィインヴィィィインヴィィイン

るー！！　な、なんだ、この痛みは！

「お、結構我慢強いねー。麻酔無しでも泣く人いるのに。ま、まだ序の口だけどねー」

こ、これで序の口！？　ありえ（ヴィィイン）ぐあっ、な、なんて痛みだ。こんな（ガガッガガガガガ）ぐうぅ！

「痛いよねー。こればっかりは鍛えることもできないしー」

き、鍛え（ヴィィインガガッ）う゛う、られないという（ガガガガッガガッ）……っ、ことは！

男の何気ない一言に釣り上げられたかかのように理論式が次々に浮かんでくる。回転するペン先、『ラ・センガン』、想像絶する痛み、鍛えられない。それらは一つの式に集約していき……！

「ねえ、白目剥いてるけど大丈夫ー？　やっぱ麻酔するー？」

必死に頷いた。

※　※　※

その後大した痛みもなく処置は済み、凹んだ歯の部分の型をとっ

て終了した。どうやらあの痛みは歯を削った痛みらしい。削ったままむき出しだとマズいので、もう一度きて上から金属で覆う必要がある、との説明を受けた後、受付の女に歯の洗浄方法を習った。『ムシバ』とやらは歯の汚れが原因らしい。もちろん、しっかりと聞いた。

「それでは木村さん、こちらがカードになります。ご確認ください」

「分かった」

「次回ですが……来週のこの時間はいかがですか？」

何やら通院が決定したらしい。さも当然のように決められたが、まあ、病気と言われれば仕方がない。しかし、来週か。魔王を倒したとしても……

「いや、もう少し日をおいてくれ」

「でしたら、再来週は？」

「それで頼む」

「はい、じゃあ再来週の金曜日、１時から予約をいれておきますね。カードにも書いておきます」

「お会計の方に移ります。今回木村さんは初診かつ保険証なしなので６０２３円（※）になります」

さてここからが問題だ。一応一番価値の高そうな紙幣を“複製（リプロダクト）”で作っておいたが、はてさて……

「これで」

……いけるか！？

「はい、一万円お預かりします。お釣りは３０００円と９７７円になります、ご確認ください」

「あ、ああ……」

えらくあっさり通った。拍子抜けだ。まあ、通用してなによりなんだが。

「はい、ではお大事にー。次の方どうぞー」

受付の言葉を背に『タナカ歯科』を後にする。治療中に浮かんだ魔法、これさえ完成すれば魔王を倒せるかもしれない。そう思うとつい足が速まる。向かう先は山、異世界の出入り口。早く帰って完成させないと！

気付けば僕は、走っていた。

※　※　※

扉をくぐれば、数日振りの元の世界。空気が美味しい。思わず頬が緩む。根無し草の僕には帰る場所などあってないようなものだと思っていたが、案外帰属意識はあるあらしい。僕の世界はここだ。そして、僕の世界を守るためにも、魔王は潰さなければならない。

感傷に浸ったところで城に戻ろうかと魔力を練り始めると、何かが近付いてくるのを察知した。かなり速い、もうくるか。弾丸のように、警戒する僕の目の前に墜ちてきたのは……リリア？

「リリア……いや、リリアさん、どうしたんですか」

「なによその敬語は、気持ち悪い」

……こんな訳の分からないことをするやつと距離を置きたくなるのは、自然だと思うが。いや、だがしかし。こんなんでも僕の幼なじみだ。僕だけでも彼女の味方であろう。

「ごめん。それで、どうしたの」

「迎えにきたのよ。勝手に異世界なんか行きやがって……次は許さないわ」

「ごめ、え、あれ？　なんで異世界のこと知っ」

「アデルの魔力反応が消えたから、王に聞いたのよ。びっくりしたわ、ホント。何を言うかと思えば異世界よ、異世界。ボケたかこのおっさんって感じだったわ」

最後まで言わせてくれない。こういう時、彼女は怒っていることが多いのだ。マズいなあ。

「兎に角、任務には私を必ず連れて行くこと。私の見ていないところでアナタが死ぬくらいなら、私が今殺すから」

「え〝、なんでそんな話に？」

「死ぬなら私の腕の中で死ねということよ」

……話が噛み合わないっ！

彼女にも何か、思うところがあるのだろう。何が言いたいのか全

く分からないが、本気なのは分かった。本気で怖い。目が怖い。

「ハァ……分かったよ。要は死ななきゃいいんでしょ？」

しかしそれでも、僕のすること、すべきこと、そしてしたいことは同じだ。

「だから死なないためにも、さっさと魔法を作るよ」

それが僕の世界を守ることに繋がるのだから。

「そう……そうね、そうするがいいわ」

「なんか上からだなあ」

だから、リリア。

「それで、どこで作るの？」

「また城で一部屋借りるよ」

「じゃあ、早く行きましょう」

「え、ちょ、なんで僕の腕を、一人で！　一人で行けますか、ぐぇっ」

君も僕の腕の中で死んでくれ。

……映像見すぎたかなあ……？

※　※　※

城へ行き、（正確には突っ込んだ。城に穴が開き、兵に囲まれ、修復代を弁償することになった。僕が。何故だ……）王に帰還を告げると早速部屋に籠もった。向こうの世界の発想を使った、対魔王用の魔法。完成図は既に浮かんでいる。ペンが走る、走る、走る。もはや反射の領域だ。しかし、なんとも長くなりそうである。長期戦を覚悟しなくては……

そして不眠不休の3日目、できた。しんどい。できたのはいいが、出力が強過ぎて作動実験ができない。ぶっつけ本番だ。だがしかし、はっきり言って失敗する気がしない。今ならなんでもできる気がする。浮き立つ気分もそのままに王へと謁見する。

「して、アデル。できたのか」

「勿論でございます。必ずや、魔王を討ち取ってみせます」

「お前はできることしか言わぬからな、相当の自信だな。期待している。……さて、肝心の魔王だが、ついに我が国の国境を跨いだらしい。今は城塞リディルで食い止めているが、破られるのも時間の問題だろう。できれば今すぐ行ってもらいたいのだが……何日寝ていない？」

「3日です」

「3日とな。なるほどそれで……では今から仮眠をとってくれ」

「今からでも行けますが……？」

「ならぬ。失敗は許されんのだ、万全で挑んでほしい。総力戦にもなるから兵も集める必要がある……そうだな、5時間でどうだろう？」

「分かりました」

「うむ、では下がれ」

「失礼いたします」

……眠い。自覚すると眠くなってきた。3日だぞ、3日。ベッド、ベッド、ベッド……

床に就くなり意識が切れた。

※　※　※

城塞リディル。建国と同時に建てられたらこの城塞は、未だかつて、修復という作業が行われることがなかった。傷一つついたことがなかったのである。１００もの魔導砲門は敵を寄せ付けず、壁にはこの世界最大とされる防御魔法陣が３重に彫られている。やりすぎだ。

そのリディルが、崩れている。そびえ立つ城壁は見る影もなく、今では戦場として踏み崩されている。仮眠を終えて来てみれば、これだ。仮眠前はなんでもできると思っていたが、とんでもない。なんて浅慮な……僕らしくもない。何故だ？

どう考えても寝不足でした。本当にありがとうございます。

……おかしい。何かがおかしい。思考に何らかの意志を感じるんだが。向こうで映像を見てからだ。精神汚染でも喰らったかのようだ。まあ、今は問題ないだろう。

ここ、城塞リディル跡で僕は、僕たちは魔王と対峙した。前方には暴れ狂う魔王と吹き飛ぶ兵たち。後方には捕縛魔法を待機中の、総勢５０人もの魔術師たち。準備が完了し、捕縛魔法最高位かつ、魔王の唯一の弱点とみられる光属性である“天使の包容（エンジェルハグ）”が展開され、魔王の動きが止まる。しかし、魔王の表情には余裕が見て取れる。……ような気がする。おそらく5分ともたないだろう。だが、その5分で十分である。

「アデル……」

「リリア……」

「……帰ってこないと許さないから」

当たり前だ、の一言が出てこない。生きて帰れる保証などどこにもないのだ。

「……行ってくる」

それでも生きて、生きて帰らないといけない。僕には待ってくれ

ている人がいる。魔王の目前に立つ。保有マナ量が大きすぎて、ブレて見える。異形の黒い人型、それしか分からない。凄まじいプレッシャー。逃げたい逃げたい逃げたい！　いや、やるんだ！

「“天使の包容”」

“天使の包容”で口を開けた状態に固定し、魔王の肩に飛び乗る。これで準備は整った。そして、これが……

「“ペン（エクスカリバー）は剣よりも強し”！」

チュイィィン！

僕の右手に光属性の魔力が先端で圧縮され凝縮、回転するペンが現れる。そう、『タナカ歯科』で見たアレだ。超高密度の魔力によって、先端を中心に空間が抉れていく。『傷』だ。そして、『傷』の中で生命は、死ぬ。

「これで……」

先端がどんどん速度と輝きを増していき、魔王を護る魔力のベールを抉り、削る。剣をも弾く強靭な肉体の鎧は『鍛えられない』口内においては裸も同然。歯に近づくにつれ魔王の顔に浮かぶ驚愕、恐怖、怒り、そして……諦念。

「終わりだぁぁぁぁ！」

ヴィィインヴィィィインヴィィィイン

「ＧＹＡＡＡＡＡ！」

「あああああ！」

もっと、もっと抉るように！

ヴィィガガッガガガガガッガガ

「ＡＡＡａＡＡ！」

「あああっ、ゴホッゴホッ、ハァハァ……あああああ！」

リリアー！

ガガガガッガガッガガガガガッ

「ＡＡＡＡａＡａＡａ……Ａ……」

「ハァ、ハァ、ハ、ハハハハ……」

魔王が、魔王が消滅した！　勝った！　僕らは勝ったんだ！

ウォォオオオ！

上がる鬨の声、皆の笑顔、そして、走ってくるリリアの泣いてるような、笑ってるような顔を見ながら、僕はこれから待っている幸福な未来、そして、どことなく痛む歯と次回の『タナカ歯科』への通院のことを考えていた。

終

**（後書き）**

※歯医者の料金設定は適当です

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9696x/

ペンは剣よりも強し！

2011年11月16日10時09分発行